

幼児の表情認知と音声の研究

宝田 恵理子

(西新井幼稚園)

1 はじめに

私が勤務する園では教育方針として、「聞く耳を育てる」意味で毎日2・3分の素話をする時間を設けている。毎日、保育室では教員の素話に身を乗り出して聞く姿が見られ、幼児は聞くことで登場人物の気持ちに共感しているのか、その状況を想像できているのかを知りたくなった。そこで、今回音声による表情認知・大きさを幼児と大人はどのように感じて捉えているのかを調査し、この結果から、保育者であるわれわれが子ども達に素話をする時の参考になればと考えている。

2 対象と方法

A. どのような表情をイメージするか

感情を込めた言葉を聞いて、どのような表情をイメージするかを明らかにすることを目的とする。

(1) 喜ぶ・怒る・泣くをイメージした声を聞かせ、①子ども達に身近で、日常よく発している言葉として「先生」を選択した。声優さんに情緒を込めた3種類の声(喜ぶ・怒る・泣く)をだしてもらいカセットに録音したものを、個別に聞かせる。(2) 音声からイメージする表情図に指差しをして選ばせる。①今井(1978)の研究で大学生が1~3位と評定した各情緒(喜び・悲しみ・怒り・恐れ)の表情図より1位と3位のもののみを描いた図8種類を使用する(表1)。②描いてある図には「まんまるちゃん」と名づけ、「まんまるちゃんが言いました。どのまんまるちゃんが言ったのか、教えてね」と教示を与える。

対象：埼玉県S幼稚園 3~5歳児(3歳児21名、4歳児34名、5歳児54名) 東京都N幼稚園 3~5歳児(3歳児20名、4歳児31名、5歳児51名)

B. 音声と表情の一致

話し手が伝えたいイメージは、言葉を通して聞き手に届いているのであろうか。実験を踏まえて幼児と大人との、音声から受け取る表情の違いを比較してみる。

「A どのような表情をイメージするか」と同様。プリントしたものに記入して回答してもらう。

対象：千葉県女子大学生95名・その他6名、東京都N幼稚園保育者12名

3 結果と考察

お話を子どもに聞かせる目的として、「①幼児の喜ぶお話をして楽しませる、②楽しいお話の中で幼児の情操を豊かに育てる、③お話を通じて基本的生活習慣の芽生えを育てる、④お話を通じて幼児の気分転換をはかり新しいことに興味を向けさせたり保育の流れをスムーズにするためと、園生活の中では保育者と幼児との心の通じ合いにお話を利用すること(相賀1974)」と述べているように保育の中での素話は大きな役割を果たしている。

お話を子どもにする時に、「心の中に生き生きとしたイメージがあり、それを人に伝えたいという衝動があつて発せられる声と、そうでない声とは聞いている者の耳には、やはり違って聞こえます」「声とイメージは切っても切れない関係にあります」「聞き手は言葉だけでなく、語り手の表情からも多くを読み取るものです」と述べている(松岡1994)。このことから表情と音声は人にイメージを与えていると考えられる。

2歳から9歳までの子どもの表情認知能力を調べたIzard(1971)は、ラベリング能力は5歳までにほぼ確立することを見出している。また、星野(1969)は、3歳から22歳までの被験者に喜び、怒り、悲しみ、楽しみ、不満、中性の表情図による表情認知を調べ、3歳児のほとんどが、すでに基本的な情緒を認知することが可能であり、表情認知における正答率は年齢とともに有意に増加することを明らかにしている。このことから、幼稚園に在籍する3・4・5歳児は、表情理解が可能だということになる。

「A どのような表情をイメージするか」の結果はどうであろうか。表情「喜び」に関しては、3~5歳児の子どもほとんどが、今井(1978)の研究で大学生が1位と3位に評定した「喜び」表情図を選んでいった。「就学前の幼児においても感情のこもった音声を意図

的に表現可能であることから、感情を含んだ音声と表情や状況の結びつきに関する理解はかなり早期から始まっていること（櫻庭 1999）」と一致する。「B 音声と表情の一致」の結果は、どの表情も 1 位に当たる図を選んでいる人が大半を占めていた。「喜び」の声を聞いて「喜び」の表情を選択した人は 113 人中 112 人である。この結果からもいえるように、「喜ぶ」の声と「喜び」表情は比較的、一致しやすいものといえる。大人の話者を対象にした実験では「音声聞いて表情を思い浮かべたという感想がいくつかあり、表情と音声は深く関連している（櫻庭 1999）」とあるように、本実験でも、あてはまるように思われる。また、年齢があがるにしたがって音声と表情との一致する確立が高いことが言える。このことから、日常生活経験から音声と表情が一致するのだと考えられる。

感情を含めた音声聞いて表情を選択した「A どのような表情をイメージするか」「B 音声と表情の一致」を比較してみる。「音声において感情は、話すテンポ、声の高さ、声の大きさによって表される（小池、斎藤、中西 1998）」とあるが、大人は、喜ぶ声には喜びの表情（今井の実験で喜 1 位）、怒る声には怒るの表情（今井の実験で怒 1 位）、泣く声には悲しみの表情（今井の実験で悲 1 位）を選んでおり、今井の実験で喜・悲・怒の表情で 1 位にランクされている表情図を選択していることから、声とも一致して選択できている。

子どもの場合、3 歳児に関しては平均的にどの表情も選択している状態で、声を聞いてその音声に合わせた表情を選択することがあまりよく判っていないらしく、選択する際にも、音声を聞く前から表情の絵を指さしする子もいた。ただ、その中でも、喜ぶ声に関しては、喜びの表情を選択する子が多いことから、「3 歳児でも表情の感情的意味をことばの上で的確に指摘し得るということと同時に、かれらは幾つかの基本的感情語の意味を表情図を通して的確に理解している（星野 1969）」こととあてはまると言える。4・5 歳児になると選択する表情も声を聞いてから、表情を見て考えて選択できる子が増え、声に対して、声と表情が比較的一致してきている。大人が選択している表情を同じように選択している子どもが年齢とともに多くなっている。しかし個々を見ると、喜ぶ・怒る・泣くの声声を聞いて、喜・怒・悲の表情を選択した 4 歳児、喜ぶ（ $\chi^2=30.526$, $df=7$, $P<0.01$ ）怒る（ $\chi^2=55.492$, $df=7$, $P<0.01$ ）泣く（ $\chi^2=57.765$, $df=7$, $P<0.01$ ）・5 歳児、喜ぶ（ $\chi^2=25.018$, $df=7$, $P<0.05$ ）怒る（ $\chi^2=74.844$, $df=7$, $P<0.01$ ）泣く（ $\chi^2=34.146$, $df=7$,

$P<0.01$ ）の結果となり、大人と子どもの間には有意差があることがわかる。

このことから、4 歳以上になると大人に似た選択ができることが言える。「4 歳になると友達と非常におしゃべりをするようになり、ごっこ遊びが最も盛んとなる。ひとりであることも多いが、全体を通じてみると、グループ行動している時間がより多くなっている。5 歳になるとお互いに物事を競い合い、同時に力を出し合って遊びを創り出していくようになる（阿部 1988）」とあるように、4・5 歳になると友達との関わり合いが増えていることから、言葉のやり取りが増えてくることによって音声から気持ちをくみ取るができるのではないかとと思われる。また、誕生したばかりの子どもは「言葉を聞くときには、ことばの意味を理解する以前に、子どもは、自分に話しかけているおとな（母親や保育者）の顔の表情や身振り、その人のおい、あるいは、声の高低、強弱、速度など、すべて総合されたものを情報として得ている（阿部 1988）」ことや、「幼児のイメージは私たち大人がつくりあげたものであり、幼児の経験の多くは私たちの手にかかっているといっても過言ではない（熊木 2000）」ということから、大人が子どもに与える影響は大きく、日々の生活から得たものによって、年齢が上がるにつれて大人と子どもの選択が似てくるとも言える。「人間は、感情を伝えるだけで相手とコミュニケーションをとることができる（小池、斎藤、中西 1998）」「コミュニケーションをとるにあたって、感情の伝達が重要な役割を担っていることは明らかである（小池、斎藤、中西 1998）」ことから言えるように、人と人との感情を含めた言葉を通してのコミュニケーションは、幼い時から生活の中で必要とされると考えられる。

（表 1）今井の順位と表情図番号

表情番号	表情	今井実験 順位
喜1		喜び1位
喜2		喜び3位
悲3		悲しみ1位
悲4		悲しみ3位
怒5		怒り1位
怒6		怒り3位
恐7		恐れる1位
恐8		恐れる3位